

江戸組紐

福田隆

家訓は「野に咲く花を摘むがごとく、ものづくりをせよ」。さりげない野花のように、人々の暮らしに寄り添うものづくりを――。



ふくだ たかし ●
1960年生まれ。
2010年、東京都伝統工芸士に認定。
2019年、現代の名工。
2023年、黄綬褒章受章。
東京都中央区日本橋富沢町 4-11



定みない手捌きで、一目ひと目着実に組み進める。作り手の心がそのまま映し出されることから、台座の上は「鏡」と呼ばれる

世界を魅了する組紐 先人と日本文化への 敬意を込めて

上/高級ホテルのフロントでも採用されている、組紐の内部を中空にする独自技術を用いた「くみひもペン」と、日常で身につけられる「二重巻組紐プレスレット」 下/中央区内の小学生たちが育てた蚕が生み出した繭と絹糸



組紐から Kumihimo へ 古に学び、未来を拓く

街角に掲げられた、「龍」の字を染め抜いた日除け幕。「龍工房」の四代目・福田隆さんは、息子の隆太さんと共に、組紐の伝統を礎にまだ見ぬ可能性を切り拓いている。

絹糸を幾重にも組み上げた組紐の歴史は一四〇〇年にも上る。正倉院の宝物として伝わる組帯、平安期の經典の巻紐、鎌倉時代の名刀の下げ緒…、しなやかな靱さと美しさは日本文化と共に在り、その職人技も連綿と受け継がれてきた。

大学時代、先々代である叔父の家で出合った一冊の本が福田さんの道を決める。そこには組紐の歴史と共に、時を経てなお褪せぬ美しさが収められていた。「子どもの頃か



一本の帯締めを作るのに、一日8時間、5日間かかることもあるという

ら見慣れた帯締めの向こうに、こんなにも大きな世界が広がっていたのか。組紐に人生を懸けてみよう」と自然に思えたんです」

大学を卒業して間もない福田さんに組紐の奥深さを教えてくれたのは、東京国立博物館にも勤めた染織の研究者・山辺知行氏だった。福田さんは増上寺の徳川家墓所から発見された組紐をはじめ稀少な文化財に間近に触れ、自身の血肉と

していく。こうした若き日の経験が、後に叔父・父の跡を引き継ぎ、歴史の中で失われた古の組み方の復刻にも繋がった。

皇室や、角界・歌舞伎界などからも厚い信頼を寄せられる現在。通常、丸台・角台・高台・綾竹台といった組み台の中から一つを選び極めていく組紐職人の世界で、福田さんはその全てを自在に使いこなす。その技と想いは二九歳という最年少で伝統工芸士(千葉県)に認定された隆太さんにも引き継がれ、親子で組紐の可能性を追求している。世界的アーティスト、レディー!

ガガ愛用のヒールレスシューズを手掛ける館鼻則孝氏とのコラボレーション、総延長六九キロの組紐で飾ったフランスの老舗メゾンの店舗内装…、組紐は今 Kumihimo

として、世界に知られる伝統工芸となりつつある。

東京都伝統工芸士会理事として伝統工芸の普及や文化活動にも取り組む福田さんは、「長く家業を続けさせていただいている中央区に恩返しをしたい」と、江戸で養蚕の会を設立し、小学校への出張授業にも精力的に取り組む。中央区内の四校を対象に、蚕を教室で育て、採れた絹糸を落ち葉で染め、組紐を組む。学校が夏休みの間は福田さん自ら校舎を回り、掃除と餌やりをしているのだという。「初めは恐々眺めていた子が掌に乗せて、名前まで付けて可愛がつくれる。生き物を育て、別れ、命の営みから生まれたもので暮らしの道具ができる。その循環と、中央区のものづくりを感じてもらえたら」と微笑む。